

# 古典經濟學に於ける市場理論の諸相

J-B. Say の經濟學史並に恐慌學說上の地位

山 口 茂

—

私は數年前一橋新聞紙上に『佛蘭西經濟學に就て』なる一文を載せた事があつたが、それが本論文の全體に通ずる私の態度を現はして居ると思ふので茲に再録して序文の役目を果させたいと思ふ。

× × ×

私は先日友人の持つて居る書物を借りて一寸序文を見たらば次の様な文句を見出した。『經濟學にとつては一般の科學にとつてと同様に外國のものだとか自國のものだとか言ふ事はなく内國もなければ外國もない。科學に國籍はないのである。イギリスのフランスのドイツの經濟學と言ふ様なものはない。經濟學は唯一つあるのみ、そしてそれは凡ての國に對して同一の強制力を持つて居る。』と、二年の歲月を歐洲に遊びその大部分をフランスに過した私にと

つては右の文章あるにも拘らず別の考を抱くに至つた。即ち學問する者の精神と目標は將に然らんと出來上つた結果は特殊な色彩を帯びてしまつて居る。フランス經濟學者の經濟學が他國のそれと非常に異つたものとして感ぜられるのである。極く手近かな所から出發して此の感をはつきりさせて見たい。

佛國經濟學者は多く多少の差異はあつても經濟學四分法の形式を捨てない。英國や獨逸の學者殊に獨逸の學者は色々考へ苦心してシステムの立方を試みて居る。然るに獨りフランスの經濟學者は依然として舊套をぬがずに治まりかへつて居る。そして生産交換分配消費に分割された中味は非常に盛澤山で何から何まで取扱はれて居て事經濟に關しては經濟原論一冊あると何でも間に合ふ様な氣がする程である。

それからも一つ吾々が直ちに氣付く事はフランスに經濟政策とか商業政策とか云ふ名のつく著書を見出す事が困難な點である。此の様な題目の書はドイツでは少くないが英佛では甚しく其の影が薄い。

此の様な形に現れて居る二つの事實は或は偶然となし或はフランス經濟學者の惰眠として看過し去り得るであらうか。フランス經濟學に對して一ベツでも加へた事のある者は必ず上の事實は決して偶然でも惰眠でもなく、むしろフランスらしさの現れた結果であると斷言し得ると思ふ。シャール・デード教授によればフランスの經濟學は今日に於てもフィデオクラットを脱して居ない<sup>(註一)</sup>。此れが上の二事實の根據でありフランスの經濟學をして他國尠くとも英獨のそれと概括的に區別し得る理由となるものである。即ちフィデオクラットの根本信條たる *ordre naturel* の考とその表現たる經濟表こそ今日に至る迄のフランス經濟學に於ける四分法——その形は變化し増減はあつても——の根源をなしたものである。Quesney の經濟表は人間の經濟生活流通生活の *ordre naturel* を圖形に現したものであ

り、之れに一致する流通生活が至上の生活たるべきである。ケネーの考が英國に渡つて再びフランスに歸つて來た時に材料の上では著しく變化したが其の意味は全く先祖の思想に基くものでありフランスのものであつた。そして十九世紀の後半に於てフランス經濟學界に於て現れた二分派即ち *ordre naturel* の思想に深く身を寄せて居る *Academicien* に屬する人々は勿論、獨逸の歴史派經濟學その他の影響を尠からず受けた *Universitaire* と共にケネーによつて殘された遺産はこれを捨てる事をしなかつた。之れが經濟學四分法の舊套を脱せなかつた所以である。

また佛國に於て英國に於けると同じく經濟政策商業政策なる書物が無いと言ふ事も同様に偶然な事ではない。英國に於ける經濟學が *Political Economy* であり佛國の經濟學に比して政策的意味を強く感じられるのに反して佛國のそれは同様に *Economie Politique* であるが、然し生活を助ける政策でなく社會生活の依つて、以て立つべき規範である。斯の如き感を佛國經濟學から受ける理由は之れ亦ケネーの *ordre naturel* の信仰乃至思想から來るものである。勿論 *Say* 以後の經濟學に於ては研究方法が實證的たるべき事が主張せられケネーの啓示によるとは著しく異つて居る様であるが、決して *ordre naturel* の思想は影をひそめては居ない。そこでフランスの經濟學は現實的實質的であり個々の經濟的事實に重きを置き之れが上に述べた四分法による生産から消費迄の經過を圖形に現はさんとする經濟表の精神と合して非常に盛澤山なものとなつて居る。(註三) 然し此の實證的方法による盛澤山な經濟學の中側には始めから定まつて居るドクマ乃至ドクトリンの伏在して外側の個々の事實に不變の生命を與へて居る。外側から見ると *positive* なものであるが内側には *natural* を藏し之れによつて外側のものが支えられて居る。そして昔に遡るに従つて *natural* なものが強く現れ現代に近づくに従つて *positive* なものが強く現れて居るの相異はあるが此の概観は

終始妥當する。此の様な社會生活流通生活の全範圍に亘り現實的實證的な然も規範的な *Economie politique* がある以上經濟政策が學問として別に存在する理由はない。理論と實際政策とはフランスに於ては分れて居ない一つの經濟學があれば必要にして充分なる要件を充して居るのである。

斯く極めて明かな手近かな事實だから入つてもフランスの經濟學が他國のそれと結果に於て異つて居る様に見える。ケネーの學問が時代と國とを超越して強制力を持つべく組立てられた事は勿論であり、J.B. Say の如きも凡ての時と所に有效なるべきものと考へたものであるが經濟學の客觀性などと言ふ點から見れば「唯一の經濟學」たり得ずして「經濟學の一つ」に了つて居る。之れ所詮は人間のわざであり考へ方の相違から來る止むを得ない結果である。(註三)

X X X

佛蘭西經濟學は重農學派の昔から今日まで全體として否定し去り得ない一つの特徴を持つて居る。之れと對立して英國の經濟學も獨り正統派經濟學のみに止らず現代のそれに於ても英國らしき味ひを感じる。經濟事情乃至經濟組織の如何によつて、之れが反映であり之れを把握する經濟學そのものが變化する事は當然であるがケネー以後スミス以後は現代に至るまで個々の經濟事情の變化は多々あつたけれども經濟組織とその大綱的な動きは變化して居ない。従つて此の時代以來の經濟學に於て上に述べた様な差別は說者の主觀的相違から發生して來たものである。そして經濟學體系——それが自己完了的體系であつてもまた積極的な體系にまともない場合に於ても——に於ける英佛の對立は客觀的事實として受容れなければならないが、此の對立は互に絶縁されたる對立に非ずして互に作用し影響しても

尙且つ残る各々の核心的なる特質から流れ出る對立である。英佛經濟學の深き交渉はケネー、スミス以來餘りにも明白な事實である。一樣に個人主義自由經濟學と呼ばれながらもギルドシステムの影響より完全には脱却し得ないケネーの經濟學はスミスに入つて初めて近代的經濟學となりそれが再びセイによつて整理せられて佛蘭西に歸り大陸に傳播せられ所謂英佛の古典派經濟學として大成した、それ以後現代に至るまで英佛經濟學に於ける交渉は勿論依然として續き兩者の融合と對立は多小の變化を伴ひながらも其儘今日に至つて居る。

さて斯くの如くケネーの經濟學がスミスに入り再びセイによつて大陸に歸つた時の經濟學は如何に整理せられ如何なる意味を持たしめられたるか。以下論ぜんとする所は之等兩經濟學體系の中心問題たる市場理論——需要供給論乃至生産消費均衡論——を通してセイの學說を檢討し以てセイの經濟學の經濟學史上の地位を定め之れを基礎として彼の市場理論が恐慌理論上如何なる意味を有するかを究めたい。

(註一) Charles Gide : *Lecole économique française dans ses rapports avec l'école anglaise et l'école allemande. Die Entwicklung des deutschen Volkswirtschaftslehre im neunzehnten Jahrhundert.* Festschrift für G. Schmoller Leipzig 1908

(註二) Say に於ける *Cours d'économie politique pratique* に於ては J. Rambaud の言へる如く經濟學四分法の端を發して居る。 Joseph Rambaud ; *Histoire des doctrines économiques* 2e éd. Lyon 1909.

(註三) 普遍的經濟學の問題に關するイタリヤ經濟學の動向は五百旗頭教授により紹介せられた。教授今後の勞作を待望する切である。(閉却されたイタリヤ經濟學、國民經濟雜誌第五十一卷第五號)

(註四) René Gonnard ; *Histoire des doctrines économiques*, 1922 Tome second, Livre IV Chapitre VI.

二

ケネーとスミス乃至之れを推廣めて英國經濟學と佛蘭西經濟學に於ける融合と對立をば之等經濟學を流通經濟論の立場より觀察する時セイの經濟學殊にその市場理論は學說史上重要な役目につくものであるが市場理論そのものは一應極めて單純なものである。先づその概要の敘述から入る。

彼の市場理論 *Loi de débouchés* が述べられて居る所は彼の數多き著作に於て決して一ヶ所に止らない。茲には

*Traité d'économie politique* に於ける市場なる章に基き紹介を試みる。(註一)

各種の産業に於て企業者は曰く生産することは困難ではないが之を販賣する事が困難である。若し販路だに適當ならば之れに應ずる生産は容易であると。然し此の考はセイにとつては全く誤れるものと考へられ此の誤りは販路なるものゝ味を正しく認識せざるより起るとなす。

一つの財貨が生産せられて市場に送らるゝ時他の人によつて其の價值が認められ以て購買せられるのであるが、その購買の手段は何であるか。之れは提供せられたる財貨と同様に勞働土地資本の共働の成果たる他の財貨である。即ち生産されたる一財貨の販路乃至市場は他の生産物であると。

斯くの如き考に對する反對論として一財貨と交換さるゝものは他の生産物にあらずして貨幣であるとの主張がある。乍然其の貨幣は支拂ふ人がその生産せる財貨を賣却して得たるものであつて結局は生産物が交換の相手方となるので

ある。若し收穫が豊富なる場合は農夫は布を買ひ得る。その收穫が豊なるだけ彼等は他の財貨を多く購買し得る。即ち貨幣を以て財貨を買ふにあらすして實は生産したる財貨で買ふのである。されば貨幣は單なる價值移轉の車であり道具であるにすぎない。之れを要するに如何なる場合に於ても一つの生産物を購買する事は他の生産物の價值を以てしても始めて爲し得るにすぎない。

以上の如き立物より當然に次の如き市場觀が發生する。(一)如何なる状態に於ても生産者の數及び生産物が増加すれば、それだけ販路は容易となる。従つてある生産物の増加は他の生産物に對する需要の増加となり前者にて現した後者の價格を増し、前者を生産するものにとり有利なるのみならず後者を生産するものにとつても有利である。故に農作物の農作なるは獨り農業家にとつて有利なるのみならず、商工業者にとつても有利である。従つて或る種の生産物の販路が閉されて居ると云ふ事は、その財貨が生産過剰なる爲めにあらすして他の生産物の生産が不足して居る爲である。(二)各人は全部の人の繁榮に對して利害關係に立ち或る種の産業の繁榮は他の凡ての産業の繁榮に好影響を與へる。従つて個人と個人、都會と田舎、一地方と他地方、一國と他國との間に此の關係が成立し一方の繁榮は他方の繁榮を結果する。(三)外國貿易の問題に極限して見れば外國より財貨の輸入をなすは自國の生産物を輸出する助けとなる。(四)一國の産業を盛ならしむるためには消費の増進が必要であり、従つて嗜好慾望を増加せしめて消費増進を策しなければならぬと。

斯くセイの市場理論は一應極めて單純なものである。即ち生産の基礎として消費が考へられ消費の基礎には人間の慾望が考へられて居るけれども市場理論の構造としては慾望と生産との連絡を其儘とり入れずして一生産物を以てす

る他生産物に對する需給の適合即ち有效需要と有效需要の對立を以てして居るのである。粗樸なる *Civilization* としての市場觀に過ぎない事以上の如くであるが、之れを通して彼の經濟學が英佛經濟學初期の連絡をなし且つ現代恐慌理論の先驅と見得るものである。

凡て社會に於て種々なる財貨が生産せられてから消費せらるゝ迄の經過を盛る社會組織乃至經濟組織を考へて見れば、それは極端なる自由主義に基く綜合經濟組織と極端なる統制主義に基く共同經濟組織との間に介在せざるを得ない。即ち前者は私有財産と分業に基礎を置く自由交換經濟組織であり後者は社會全體が一個の經濟的經營の對象となり其の經營は一つの意思によつて統轄せられ組織内の個人は自由意思なき分子に過ぎない。經濟關係より見て個人と社會を如何なる状態に於て調和せしめんと慾しても上の兩極の中間何所かにて落付かしむる外はない。歴史的に見て此の兩極が必ずしも存在して居つたと主張するのではないが實際の經濟社會は此の間を往來して居るに過ぎない。斯くの如き經濟組織——之れを財貨の流通なる點より見れば市場組織——を經濟學の問題として見る時經濟的事實と學問する者の主觀とによつて如上社會と個人、全體と部分の調和は種々異なる點に於て求められて居る。茲に問題とする時代の經濟學に於て同一なる經濟的事實を對象としながらも尙スミスとケネーの對立を形成して居る。茲にはセイの市場理論が如何にして英佛經濟學の連絡乃至綜合の役目を果し得たかを述べる。

(註1) J.B. Say : *Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses.* 6e éd. Paris Guillaumin 1841. Livre premier, chapitre XV. Des débouchés.

セイの經濟學を生んだ母體はスミスの經濟學である。セイの市場理論に比ぶべきものはスミスに於ては國富論第一卷第六章及第七章に於て直接に見出し得る。即ち第六章「貨物價格の合成部分に就て」に於ては生産と所得の調和關係に就て述べて居る。之れによると凡ての貨物の交換價值即ち價格は賃銀利潤及地代の全部又は一部に分解せられる。個々の貨物價格の構成が上の如くであるから一國全體の生産物の價格に就ても同様の事が言ひ得る。故に一國勞働の結果たる *annual produce* 全體も亦此の三つの價格構成部分に分解せられ各々の價格構成部分は賃銀利潤及地代として國內に分配せられる。如何なる社會に於ても勞働所産の全部即ちその價格は斯くして其の社會の構成員に分轄せられる。賃銀利潤地代は凡ての所得の根源であると同時に凡ての貨物の交換價值の根源である。而して凡ての他の種類の所得は終局に於て之等賃銀利潤及地代の三つの何れかに基いて發生するものである。斯くスミスに於ては社會に於ける凡ての所得の直接或は間接に生産物價格の構成部分となり従つて一國に於ける所得の合計は生産物價格と一致し、生産結果と所得との量的不一致は起らない。

然るに賃銀利潤及地代には *ordinary or average rate* がある。此の *rate* に於ける所得乃至價格構成部分によつて價格が構成せられたる場合が自然價格にして之より離れて價格が成立したるときは市場價格と稱する。而して市場に於て交換せらるゝ貨物の價格が自然價格以下にて決定したるときは各種生産要素の所得が其の貨物の生産より脱し

他の有利なる生産に向ふべきを以て其の貨物の供給は減小しその價格の騰貴を見る。價格が自然價格以上にて決したる場合は之と反對となる。斯くて自然價格は價格變動の中心をなし市場に於ける貨物の價格は之れより甚しく離脱する事がない。所謂需要供給の法則であつて之れによつて市場の調和を持來するのである。之れが第七章「貨物の自然及市場價格に就て」に於て論じられて居る。

斯く言ふ所を市場調和なる觀點から見ると各種貨物はその價格が自然價格以外の點にて決定したる時は供給過剰又は供給不足による部分的の市場不調和を示すも此の種の部分的不調和は自然價格を中心とする需要供給の機械的作用によつて自ら調節さるべき一種の經濟循環を説くものである。而して一國に於ける生産と所得との關係は全體として常に一致し各種貨物の價值が自然價值以外にて成立し居る場合に於ても一國生産高と所得量とは全體として一致する。即ちスミスに於ては生産過剰は常は部分的供給過剰にして然も彼の需要供給論によつて自働的調節をなす關係に置かれて居る。

英國正統派經濟學に於ても自然價值と需要供給論は説者によつて必ずしも同一ではない。然しながら James Mill はスミスと同一意義に於て此の問題を論じ、且つスミスの如く價值構成論として及び市場に於ける價格の變化として考へたるより一步を進めて生産と分配の適合及び生産過剰の有無とし論じて居る。即ち *whole annual produce* と *whole of the shares* とは常に一致し生産と分配とは常に合致し又資本の生産等に於ける分配の不適當なる爲めに或る貨物に就て生産過剰起れば必ず他に生産不足を生じ市場に於ける價格の騰貴によつて資本が有利なる方面に移動し以て生産不適合は調節せられると。<sup>(註一)</sup> スミスの需要供給論もその意味する所は James Mill と同様であつて只 James

程問題を明確に進めて居なかつたに過ぎない。

以上述べる所によつてスミスの需要供給論はセイの市場理論と比べて甚しき相違なく小くとも外見上は市場調和なる觀點に立つて同一種類の型に容れる事が出来るであらう。兩者共に貨物の部分的不足と部分的過剰を認め全體としての貨物の過不足は之を問題として居ない。斯く兩者は共に部分的生産過剰の生起を認め共にその自働的回復を信じて居るが此の二つの理論の意味する所は實は必ずしも同一ではない。此の二つの需要供給論或は市場論はその形に於て等しきもセイの意味する所はスミスに對し根本的な變化を興へて居るのである。セイの經濟學がスミスの經濟學の祖述でありながらその精神に於て全く異つて居ると同一事情に基くものである。

(註一) James Mill: Elements of political economy.

#### 四

セイの市場理論とスミスの需要供給論は共に貨物の部分的供給の過剰乃至不足を認め且つ之れが自働的回復を考へて居るのであるが私は此の様な二點に於て兩者の差異を感じざるを得ない。即ち(一)此の兩理論によつて考へらるゝ市場の構造上の相異及び(二)従つて起る市場の作用の相異之れである。

第一の點に就て見るにセイの市場は外廓的に調和せる市場であつて其の市場を現實に構成する賣手と買手供給者と需要者、生産者と消費者即市場構成員は獨立の存在を保ちつゝその外廓的に調和せる市場に一致すべく約束せられて

居る如くである。市場そのものゝ型に合致すべき活動のみを約束されたる分子にすぎない。然るにスミスの場合市場そのものは現實の構成員そのものに外ならない。存在するものは買手と賣手であつてその活動の結果として市場そのものが考へられるにすぎない。斯く第一の點に就て考へるとセイの市場は市場そのものゝ型が確かに存在して、その中の構成分子はその型にあてはまる様に動く。市場の構造として市場の外廓的調和と内部の個人の活動とは一致する關係におかれて居る。然しスミスの市場に於ては全く逆で實在するものは個別的な賣手と買手でありそのまゝとまりとしての市場はセイの場合に比し甚しく影が薄い。

斯くの如き市場構造上の相異は當然に第二の點即ち市場の作用として現れセイの市場に於ては市場に於ける貨物の販賣困難はその貨物の生産過剰によるに非ずして他の貨物の生産不足を意味し他の貨物の生産増加によつて市場の硬塞は除かれる。市場は常に調和すべきものであつて市場の構成分子の動きか如何にあるとも市場の水準は決定し此の水準に一致する様に構成分子の活動が約束せられて居るのである。然るにスミスの場合市場に實在するは賣手と買手でありその活動の結果として市場の水準が出来上るのであるから、その水準は構成分子の動き如何によつて如何なる點にも定まり得るのである。一方は個々の市場構成分子は如何に勝手に動いてもその結果は市場全體としての調和的水準に迎へられる安心があり、他方では市場構成分子の個々の活動が市場水準の決定に重きをなして居る。

上の如き兩市場理論の意味の相異は私は確かにあると思ふが對立を明瞭ならしむる爲めに不知不識多少鼓脹したかも知れない。私が然か感ずると言ふ丈を述べたのではその根據が明確でない。故に先づスミスの需要供給論を斯く受取らなければならぬ基礎を考へて見る。

スミスのみと言はず一般に英國經濟學を見るに個別的經驗的方法が用ひられて居ると見ること何人も異論はないであらう。スミスの經濟學を通じて實在するものは常に個々の事物個々の人間であつて之等獨立個體を包含すると考へられる世界、社會、近隣、市場等は實在しない單なる名目であり概念たるにすぎない。而して之等實在する個體も名目に過ぎる概念も常に經驗的なるものが基礎として考へられ取扱はれて居る。個別的なる事物が具體的であり經驗的である事は論のない所であり之れが尊重せられて居るは彼に於て當然であらうが、名目に過ぎない概念も出来る丈け經驗的なるものを基礎として取扱はれて居る。社會と言ひ近隣と言ひ市場と言ふも一方にその中に動く具體的なる個別に重きを置くと同時に此の社會とかあの市場とか經驗的なるものを基礎として居る。(註)

斯く實在するものは個別的經驗的なるものであつて全體そのものは實在性を有しない。個別的なるものは全體の構成分子ではなく全體は個別的なるものゝ集まりに付した前名にすぎない。従つて個別と個別との間の連絡關係は全體對部分の關係を通して居ない爲めに極めて薄弱である。

斯の如き考へ方はスミスを讀むに當つて始めから終りまで常に出發ふ問題であり、上に問題とし居る市場論乃至需要供給論に於てもその例外をなして居ない。即ち先に述べた様にスミスの市場に於て實在するものは經驗的個別的のものである。従つて市場に於て成立する價格は個別的なる賣手と買手の掛引きの結果として成立する經驗的な價格である。市場價格の中心をなす自然價格もスミスに於て個別的經驗的結果であつて多種多様に成立した價格の *ordinary or average rate* にすぎない。然も自然價格はそれ自體として直接に把握せられないで價格構成部分としての三つの所得即ち賃銀利潤地代の *ordinary or average rate* に基いて歸納して得た結果である。斯く彼の需要供給論は彼の

學問的方法よりするも論そのものゝ内容構造より見るも個別的具體的經驗的なるもののみ實在して市場そのものは概念的存在に過ぎずして賣手と買手とその個々の動きに比して第二次的重要性しか持たない。

勿論此の自然價格は *Ricardo Malthus* のそれ等と共に全社會の全經濟生活が凡て均衡を得た理想的な靜的狀態に於て始めて起り得るもの換言すれば理想的靜態の價格に於ける表現たる意味を持ち得るのであるが、*Smith* 自身の方法から言へばそんな全體の見通しを自覺する筈もなくまたそんな要求がある筈がない。少くとも彼の經濟學敘述の方法に於ては自然價格にそれ程のつきつめた意味を持たす必要はない。

乍然 *Smith* の經濟學に於て分業による生産増加を持來す條件たる交換經濟の基礎は個人の自利心の上に置かれ社會生活全體の運行は個人の自利心なる車軸を中心として回轉する事によつて始めて圓滑なるを得るとせられて居る。即ち個人は制限せらるゝ事なく此の自利心の教ゆる所に從ひて行動すれば社會は自ら見えざる手に導かれて調和すると考へる。所謂自由主義個人主義經濟學と呼ばれるのは此所に據るのであるが自利心に基く個人の自由なる行動により自ら發生する社會調和——之れを狭く見れば前の市場調和——即ち見えざる手による社會的安定は *Smith* に於てそれ程信頼出来る積極的な型と力とを持つて居るか如何か。若し自由主義そのものによつて完全なる社會調和經濟的均衡が招來せらる事が保證せらるゝならば *Smith* の市場理論はセイのそれに比し上述の如き對立はなくなる理である。

自利心に教えられて自由に行動する個人個人の集合せる社會に於て個人個人の何等連絡なき行動の結果が全體として自らなる調和に到達すべき事は個別的經驗的なるもののみ實在性を認め社會は單なる名目的概念に過ぎずとなす *Smith* ではあつても勿論信じて居つた。如何なる内容にしてもまた如何なる程度に於ても自然法に歸依し自然的秩序

を信仰する當時の思潮として社會調和の安心なかりし筈はない。況んや *invisible hand* を口にするスミスに於ておやである。乍然その社會調和市場調和に對する期待と安心とは後に述べるケネーやセイのもつそれに比べると甚だ薄弱である。個人個人の行動の結果は社會全體としておのづから調和するであらうが個々の行動と全體の調和との關係は明瞭ではない。*invisible hand* は世の中の *destination* は示すがそこに至る迄の *process* に就ては餘り多くを語つて居ない。

一般に英國正統派經濟學は自由主義經濟學なりと云はれて居る。個人個人が自利心に基いて自由に行動さへすれば自ら社會的調和が來ると言ふその自由は英國正統派經濟學に於て社會調和經濟的均衡を招來する上に於て幾何の効果ありと考へられて居つたか、従つて之れに對して幾何の期待が懸けられて居つたであらうか。

英國正統派經濟學に於て自由なるものゝ意義は必ずしも同一ではない。スミスの場合は國家權力其他の制限干渉よりの解放の要求であり *negative* な自由を意味すると言ひ得る。リカルド、マルサスに至るとスミスによつて解放せられたる個人個人が自利心に動かされて相互流通生活を營み社會の構造を所謂自由競争なる基礎の上に建立して居る。スミスに比べて自由がより多く *positive* なる意味を帯びて來て居る。然し之等何れの意味に自由を解しても英國正統派經濟學に於ける自由(主義)は *invisible hand* があるにかゝわらず個人の集合たる社會の調和を保證する教理を解すべく基礎がない。個人をして爲すがまゝになさしめよ、然らば世は自ら行かんと言ふ自由主義の強き効果はミスは國富論の何れにも述べて居ない。*laissez-faire* なる言葉はスミス、リカルド、マルサス、の著作の何所にも之を見出し得ない。またその精神を含む *dogmatic form* をも吾々は見出し得ない。スミスは自由貿易論者であり十八

世紀に於ける商業に對する制限に反對であつた事は論をまたぬ。然し航海條例や利子制限法に反對せざるより見れば彼の自由（主義）は決して dogmatic なものではない。（註三）

自由放任主義乃至自由競争主義を *ism* としてなす一般的なる主張は之れによつて社會調和經濟的均衡による福祉と向上が明瞭に指示され然も之れに到達すべき徑路が畫き得る時にのみ始めて可能である。スミスの自由は解放の要求が中心の意味をなすに過ぎず。リカルド、マルサスが若し自由主義を如上の意味に於て抱き之れを主張するとせば、之に依つて彼等は社會人生の將來に光明のみを認めなければならぬ筈であつた。然るにリカルドに於ては想定する自由なる社會に於ては地代は漸次騰貴し他の勞資二階級の所得を蠶喰し然も勞資各階級の所得は必然的に背反すべき理を教え、マルサス亦社會の將來に極度の悲觀を抱ける事は何を意味するであらうか。之れ兩者の想定する自由主義なるものが極めて影の薄いものである證左とする事が出来る。即ち其所に自由主義ありと一般に考へられてもそれは經濟學理論の一般的基礎としてのイズムたる力はない。自由主義經濟機構の將來を悲觀する  *pessimist*  が自由主義そのものを  *dogma*  として維持し得ないのは當然である。即ち所謂自由主義が此の程度のものである場合にそれが市場調和に對する效果に於てセイの市場理論に對し薄弱な事は止むを得ない。

乍然スミスの自由主義が一般的教理  *dogma*  ならずとしても、彼の交換經濟市場は個人個人が自利心に基きて自由に行動する事を基礎として考へて居る。然らば個人の自由行動が一般的教理としての自由主義の基礎の上に立たざる場合に如何なる基礎の上に理解さるべきであらうか。之れ本節の始めに述べたるスミスの個別的經驗的方法によりし結果と解せなければなるまい。彼の市場に於て實在するものは個人であり市場に於ける中心規準たる自然價格すら個

個人間の間に行はれたる個々の取引による價格から歸納的に得たものである。此の複數なる個人個人が全體として統一せらるべき先驗的なるシステムより遠かり個人個人が自利心に教えられつゝ手近の經驗にのみ基いて行動する個人は自由の行動を爲すのである。さればスミスの自由（主義）は經驗主義個人主義の結果生じたものであつて個人は各自勝手に行動する意味の自由である。勝手に行動する個人が不識の間に一つに結ばれる豫想はあるが之れに至る徑路は影が淡く先驗的なシステムによつて統一されておるのではない。

斯くスミスの需要供給論——市場理論の核心は個別的なものであつて全體のまとまりはその基礎弱いものであると言はなければならぬ。

（註一） スミスの社會 society 近隣 neighbourhood 市場 market の様な概念はその中味である構成分子から見ると一個の名目として受取れるのであるが然もなほ之れ等の概念は全卷を通じて early and rude state of society とか civilized country とか具體的用法に近かしめられて居る。第三卷の内容を思ひみる時尙その感を深くする。

（註二） Wealth of Nations, chapter VII

（註三） J. M. Keynes: The end of laissez-faire, London 1926 經濟學に於て佛蘭西の自由と英國の自由とは概括して本論に述ぶる様な相違があると思ふが、英國の當時の經濟思想に於て一般に自由主義は考へられない様に思はれる。Manchester school に於ても doctrine としよの liberalism は肯定し得ないのであるまじか。此の點について私には未だ斷定を下すべく自信はない。が一八四四年の英蘭銀行法に關する Cobden の意見は該法律に對し無條件に賛成して居る事から見てもマンチェスター派も經濟問題に關し一般的に自由を主張したものではない様である。職業自由の主張が通つて商工業階級が力を得て來てから對外的發展の爲め自由の要求が自由貿易主義に進展したものと見得る。であるから銀行に就てのあの制限的な規定は通貨問題な

る點から見て Cobden によつて容易に贊成せられたのであらう。Manchester school の自由主義は自由貿易主義乃至自由貿易主義を中心とする主張にすぎずと見るは非か？

## 五

アダム・スミスの需要供給論を以上の如く解したがその經濟學の祖述と考へらるゝセイの經濟學に於ける市場理論は前章初頭に述べた如き相異をなして居る。兩者共に部分的生産過剰を認め共にその自動的調節を考へて居ながら市場の構造と作用に於て甚しき差異を藏して居る。スミスの市場が上述の如く個別的經驗的なるに對してセイの市場は綜合的先驗的なる意味を得て居る。之れ材料に於て英國より受けて居るにかゝらず之れを受取るに佛蘭西經濟學の精神即ち先代ケネーの精神を以てしたのによるものである。即ち個人の集合たる市場を單なる名目たるに了らしめずして市場構成分子たる個人は獨立の存在を保ちつゝ全體として先驗的な調和市場なる型にはめられ完全に統一せられたのである。以下小しくその理由を究めて見る。

セイの市場理論を名目的個別的なものたらしめなかつたものはケネー經濟學の流通理論たる經濟表の精神である。此の經濟表が財貨の生産と分配とを含む市場理論であり此の裡に於て生産より消費に至る財貨の動きも個人個人の活動も自然的秩序に基いて完全に規律されて居る。即ち經濟國家内に於て生産さるべき財貨は農産物と工業製造品との間の比率と數量は經濟表の上で規定され、個人個人の活動も生産物間の比率とその數量に付隨して自然的秩序に合す

べく制約せられて居る。之れ超經驗的なる自然的秩序による完全なる統制である。然るに市場構成分子たる個人個人の側から見ると完全なる自由が興へられて居り *Taissez faire laissez passer* と主張せられて居る所以である。理性に基く個人の自由なる行動の社會的結果は正確に經濟表の型にはまらべき運命にある。ケネーに於ける自由主義は直接神意による自然的秩序に基く全體的調和によつて支へられて居る。此の點より見てスミスの個別的經驗的なる自由とはその意義を異にし個人個人の自由行動の社會的結果はスミスに於ては必ずしも調和に至る徑路を跡付け得ない。個人の動きによつて現實に成立する市場價格は多く不調和の相を示すものであつて市場調和の指標たる自然價格はその平均の結果わずかにうかがひ見得るにすぎない。全體として斯くの如き程度に締めくゝらるゝに過ぎないスミスの個人的自由はたとへ需要供給論によつて自動的個節が保證せられても經濟表によつて示された完全なる調和を行先となすケネーの個人的自由とは全然異つて對立を示す。ケネーの意味に於てこそ始めて社會生活の規範として自由主義を主張し得るものであつて此の場合個人の自由は社會的立場に立ち何の危険も不安もない。斯く觀じて來るとケネーの自由主義を自由主義とするならばスミスの自由主義は自由主義にあらず個人主義の一面にすぎない。若しスミスの自由を自由となすならば完全なる統制を豫定さるゝケネーの自由は自由にあらず非自由なりと言ひ得る。

斯く異つた意義を有する個人と自由とを材料として構成せられた市場がケネーとスミスに於て相異つて居る事は當然でありケネーの市場理論に於ては調和せる市場が嚴として存し個人個人は自由に行動してもその市場に合致すべく附加せられたに過ぎなく、スミスの市場理論に於ては個人のみ存してその集合たる市場は第二次的重要性のみ保有するに過ぎない。

一方は市場の調和的外廓に對し個々人が附屬し他方は個人個人の行動のみが存在して市場は謂はゞその片影にすぎない。<sup>(註一)</sup>

斯くの如きケネーとスミスの市場理論は完全なる對立をなして居るが此のケネーの市場理論の精神を以てスミスの市場理論を受取つたものがセイの *Loi des débouchés* である。即ち前節に述べたる如くセイの市場に於ては構成員は獨立の存在を維持しつゝ然も自然的秩序に基礎づけられたる調和せる市場の型を保有せるものである。

セイの市場調和觀の直接の表現は彼の「生産されたる一財貨の販路乃至市場は他の生産物である」となす財貨の二面的作用——一個の財貨は自らを供給すると同時に他の財貨に對する需要として働く——である。之れによるとき市場に現れたる財貨は凡て供給たると同時に他の財貨に對して需要として作用をなし従つて市場に於て需要供給不適合の起る事なし。此の考はケネーより相續したものであつて、その依つて來る所はその經濟學が *Güterlehre* であつた事と等價交換の思想にある。即ちケネーの經濟學は當時の經濟學の一般的傾向の例外たらずして財貨を人間との關係より浮びあがらせて財の生産流通消費の關係として取扱つて居る。然るに他方に於て *Mercantilism* の國際貿易論に對する反動としての等價交換の思想を抱き凡て買ふ事は賣る事であり、凡て賣る事は買ふ事であると主張する *the est de fait que tout achat est vente, et que toute vente est achat.* <sup>(註二)</sup> 他の *Physiocrate* の人々も之れに等しき考を抱き *Dupont de Nemours* 亦 *Nécrologue de M. Quesnay de Saint-Germain petit-fils du Docteur Quesnay* <sup>(註三)</sup> に於て *Acheter c'est vendre et vendre c'est acheter* と主張し *Mercier de la Rivière* 亦 *L'Ordre naturel et essentielle des sociétés politiques 1767* に於て同様の説をなして居る。

此の考は一様に一つの財は他の財に對する交換關係に於て需要であると同時に供給をなす意にして市場に於ける凡ての財貨は互に需要供給の二面を有し、從つて生産されたる財貨の交換に於て需要供給の不適合なる事實なき事を考ふるものである。此の等價交換の思想從つて市場に於ける財貨の二面的作用は社會的結果としてケネーの *Tableaux Economique* となりヤネの *Loi des débouchés* となつたものである。

(註一) 此の事は言葉を換へて言へばケネーに於ては統制ある國家經濟の經營の結果として動く市場の解消した意味である。一意思に基く計畫經濟に於ては市場は固定して動く必要がない。故に市場論として見れば水準の確定せる市場に個人個人は追從する許りである。然るにスミスの場合には統制はむしろ市場の動きによつて誘致される。故に動く意味の市場論はケネーに於てよりもスミスに於て之れを見る。經濟學構造上から見るとケネーの場合は國家經營の經濟論でありスミスの場合には全體が市場論乃至流通經濟論に結びついて居ると言ひ得る。

(註二) J.B. Say: *Traité d'économie politique*, Chapitre XV.

(註三) *Oeuvres de F. Quesnay* éd. par Orékan.

## 六

扱てケネーの調和觀を以てスミスの需要供給論を受取つたセイの經濟學に於ける市場理論は明確なる市場の外廓を得ると同得に決して市場構成員の獨立存在性を失はしめて居ない。市場に於て自由競争の上に行はれたる個人個人の活動は市場に於ける價格の成立上獨立の影響を與へる。之れに對する根據は彼の經濟學研究方法によつて明かならし

め得ると思ふ。

彼は經濟學を打立てる前にシステムを重んじたケネーの方法に反對し Bacon の實驗的方法を採用せん事を主張して居る。即ち觀察と實驗とによつて *réalité* なる事の證明されたる事實 *fait* のみ眞である。而して經濟學の取扱ふ事實は二つと見得る。一つは一般的恒常的事實 *faits généraux et constants* であり他は特殊的事實 *faits particuliers* である。前者によつて研めらるゝ因果關係は同様の場合には常に同様なる因果關係ありとなすを得べく之れによつて *lois générales* を得る。特殊的事實は *lois générales* に基きて發生するものなるも多數の *lois* の競合して然も他を破る事なく影響しあふ事態の下に發生する事實である。而して社會に於て現實に發生する事實は多く *faits particuliers* にして之れを觀察する事によつて *faits généraux* を見出し之れにより *lois générales* を抽出する。例へば利子は貸手の負擔する危険に比例して高くなる *loi* があるが、若し危険なる場合に低利にて貸付けたる時は此の法則は誤りなりと云ひ得べきか。否此の場合には *loi générale* が *fait particulier* によつて妨げられたものであつて此の障害にして除かるれば *loi générale* は如實に現出すべきものであると言ふ如きである。而して斯くの如き法則を導き眞理に到達する爲めに據る所は唯多きを以て可なりとせず *faits essentiels* たるを要し之れを各方面より觀察し正しき法則を得る。(註一)

斯く誘導したる法則は常に事實に合するやを確め以て *principes* を確立し茲に經濟學は實證科學 *science positive* となる。(註二) 而して他の正確科學と同じく小數の基礎的原理 *principes fondamentaux* と之れより誘導したる系 *corollaires* より成り之等少數の原理を組合せて互に助合ふ完全なる一體をならしめ以て *systeme* を形成する。即ち *systeme*

たる以上中に抱合せられたる眞理の間の連絡が完全にして相互依存の關係に置かれ、その證明は内に於て自らによつてなされなければならない。<sup>(註四)</sup>

斯くセイの經濟學方法は經驗的事實より出發して之れを一個の *systeme* にまで組立てるのであるが此の場合の統一原理は自然法 *loi naturelle* によつて與へられる。第一節に於て述べた様に此の場合經濟學は現實的實證的であり個々の經濟事實に重きを置き従つて盛澤山なものとなつて居るが、然しそれ等の經濟的事實は自然法によつて與へられて居る統一原理によつて整理せられ外側の個々の事實は不變の生命を與へられて居る。外側から見ると *positive* なものであるが内側には *naturel* なものが伏在しそれによつて外側の事實が與へられて居る。換言すれば個々の事實を通じて不變の規則を見る、個々の事實を材料として生かし之れを通して法則に達する。

斯くの如き方法は市場理論に於ける個人と市場との關係に於ても現はれ個人個人は獨立の存在を保つと共に然も亦市場の實在を失はしめて居ない。即ちセイの市場に於ては各構成員はスミスの場合の如く獨立の存在を有しその結果たる市場は單なる個々人の片影にあらずしてケネーの如く亦實在するのである。

(註一) J-B. Say : *Traité, Discours préliminaire*

(註二) J-B. Say : *Cours, Considération générale*

(註三) J-B. Say : *Traité, Discours préliminaire*

(註四) J-B. Say : *Cours, Considération générale*

## 七

私は前章までに於てセイの市場理論がケネーとスミスとの間に介在して如何なる地位を有するかを多小なりと説き得たと信ずる。本節に於てはこの市場理論を通してセイの經濟學がケネーの經濟學とスミスの經濟學との間に於て占むる地位を考へ以て市場理論の意味を一層鮮明ならしめたいと思ふ。

此の問題に對する私の答案はセイの市場理論が上述の如くケネーとスミスの市場理論の綜合であるある事實が即ちセイの經濟學がケネーとスミスの經濟學の間に立つて同じ意味の綜合作用をなして居る事である。より一層答案の要點を示すならばセイの經濟學は個別的經驗的にして體系なきスミスの經濟學を材料とし之れをケネーの經濟表の精神を以て體系を與へ體系ある近代的經濟學となしたものであると考へる。

既に述べた様にセイの市場理論はスミスの個別的經驗的市場にケネーの統一的な市場の外廓を與へたものであるが此の事のみを以てしても直ちに兩者の經濟學の綜合と見得るものである。何となればケネーの經濟表は彼の經濟學に於ける全視野の表現でありスミスに於てその需要供給論は第一巻の中心をなす理論であり國富論に於て第一巻は全體の内の主要問題なりと見得るからである。ケネーの經濟表が彼の經濟學の全視野を包含するものなる事は恐らく何人も異論はないと思ふがスミスに就ては一言を費す要があらう。

スミスの學問に於て方法論的に體系なき事に就ては既に明快なる論があり國富論(註一)に於てもその問題の取扱ひ方、敍

述の様態、各卷各章間の關係等よりしてつぶさに而して容易に彼の個別的名目論的態度を見出し得ると思ふ。茲に問題となる各卷の關係を見るに第四卷の最初に述ぶる如く *political economy* を二分し一つは國民が如何にして生活の爲めの所得を得るかを論じ他は國家の財政的収入を取扱ふものとなし居り要するに經濟學は *people* と *sovereign* とを如何にして富ましむるを得るかを問題として居ると説く。ケネーの經濟學乃至經濟表が一個の流通經濟學でありながらスミスの第二の問題即ち國家財政論の上に建立せられてあるに反しスミスはケネーに於ける土臺と上家とを形の上では並べて二つの部分としたのである。即ち第三卷迄とそれ以後とが分れて二つの部分となつた。而してケネーに於ては國家財政的目的が直接の關心事であり流通經濟論は財政的目的達成の手段であるとすら受取らるべく従つて彼の經濟學は國家經濟論と見得る。之れに對してスミスの經濟學に於ては國民生活の福祉即ち國富論の前半が重要な地位を占め綜合經濟を對象とする近代的經濟學となり國家は *negative function* を持つに止り財政論は流通經濟論に比し彼の經濟學に於て第二位に降つた觀がある。

斯くの如き關係にある國富論前三卷の第一卷に於ては生産増加を目標とする流通經濟關係を論じ第二卷は資本の蓄積なる觀點より第一卷の問題を考へ第三卷に於ては蓄積せられたる資本の農工商への動向の順序傾向とその結果としての福祉の相異を考へて居る。従つて第一卷は前三卷の基本となり尙後半の財政論を加へたる國富論全體の中心と見得るものである。されば第一卷に於ける需要供給論は斯くの如き關係を通して國富論に於て——殊に流通經濟論と見る時——中心的理論なりとなし得るのである。

斯くの如き意味を有するケネーとスミスの經濟表と需要供給論とを綜合するセイの市場理論は同時に兩者の經濟學

を綜合したものと云ひ得る。即ち此の關係のみよりしてもスミスの個別的經驗的なる經濟學はセイによつて綜合的なものとなり名目的理論が一躍して本質論となつたと言ひ得る。然しながら尙一步進めて各經濟學の内容に立入つて如上の關係の存する事を説いて見度いと思ふ。

然らばセイの經濟學が市場理論を通して如何にして内容的に體系なきスミスの經濟學に體系を與へ得たと言ひ得るか。

本節初めにも述べた如くにスミスの經濟學は綜合經濟を對象とする經濟學であり之れを祖述せるセイのそれも亦同様である。然るにケネーの經濟學は自由主義の下に經濟單位間の流通關係を規定せんとする綜合經濟學でありながら全體として國家財政目的の手段たり専制君主の治國平天下の格言たりし爲め國家經營論たる意味を持つて居る。(註二)此の國家經營論たる意味が内容の上でケネーの經濟學にシステムを與へて居りセイの經濟學が同様の意味でスミスの内容を祖述しながら體系あるものたらしめて居るのである。即ちケネーの經濟諸理論は經濟表によつて統括せられ經濟表は生産より消費までの経過を示すものであるが其の間を往來する財貨の量は其の社會生活を維持すべき量であつて與へられたる條件に於ては定まつて居るものである。與へられたる社會に於て生産と消費、需要と供給の均衡の保たれたる關係に於て財貨量は一定して居る筈である。此の定量財貨が經濟表の上に盛られ之れを以て國家經濟經營の手段とし之れとの關係に於て彼の經濟理論が内容的に統一せられて居るのである。

然しながら此所に一應疑問と考へ得らるゝ事は此の社會生活を維持すべき財貨量が單純に有形的なる量によつて考へられて居るか如何かの點である。即ち價格經濟に於て起る價値の逆理乃至效用量と價値量との矛盾の問題はケネー

に於ては發生しなかつたであらうか。此の疑問は *Abondance et non-valeur n'est pas richesse. Disette et cherté est misère. Abondance et cherté est opulence* なる標語が彼の論文の各所に見出さるゝ時價格經濟關係を考慮して居る事が理解せられる。然るに尙且つ上の如く財貨量として受取られ得る根據は何所より來るか。

想ふにケネーの生産不生産の區別が效用ある物質量を標準とせる事は勿論であるが、その生産されたる物質的なる量は價格經濟關係の支配を受ける。農業によつて創造された生産物も市場に於ける價格の外に超然たるを得ず農業生産物も工業生産物も共に市場價格の法則の支配を受くる事を認めて居る。而して若し穀物の下落により農業に於ける純収益が消滅すれば此の純収益に依つて維持されて居る他の階級も亦不利益を被り、かくて一國の繁榮は失はれて行く。故に此の繁榮の爲めには工業商品の價格が生産費價格と一致する事が望ましきものなるとは反對に、農業生産物の第一の賣り手の價格が出来るだけ生産費價格以上なる事が自然的有利であり、之れが、純收入を産み出す *le bon prix* であらねばならない。農業生産物の海外取引の制限せられ居つた佛國では年々の豊凶如何によつて穀價の騰落甚しかつたが、之れ自然的秩序たる自由取引が行はれ居らざりし爲めとなし、取引自由こそ穀價維持の要件であるとなした。斯くて商業自由の行れる自然的秩序の下に於ては工業商品は生産費に一致し農業生産物に就ては *produit net* が保證せられ *abondance* にして *cherté* を維持する所謂 *le bon prix* の實現となる。斯くの如き關係に於ける *le bon prix* 乃至 *cherté* が法外の高價乃至純収益を意味する事なきは勿論であつて自然的秩序の下に凡ての經濟的關係が其の所を得て落付ける状態に實現された價格に外ならないのである。此の自然的秩序の下に於て工業商品は生産費に一致するが農業生産物の *cherté* 或は *le bon prix* の實現として法外なる價格或は *produit net* を要求するもの

に非ずとせば如何なる程度に於て要求せられて居るか。此の高價なる意味は取引自由の下に於ける國際價格關係によつて規定せられるとなして居る。即ち『商業自由の下に於ては生産物の高價と言ふ事は當然に他國の生産物の價格に依つて定められた限界をもつて居る。故に高價と言ふ意味は過度なる値段を意味せずして吾々と外國人との間の共通の價格を意味するものである』<sup>(註三)</sup>。而して工業品に就ては彼は『労働の費用が工業手工者の製品の價格を定め彼等の競争が其等の労働の費用を限定する』<sup>(註四)</sup>。となし労働者は生活費以上に餘剩收入を生じない。<sup>(註五)</sup>されば工業商品價格は自然の秩序に於て生産費と一致する。

斯くの如くケネーに於ては經濟的國家の經營に要する富は生産物量として考へると同時に（生産不生産の區別標準たる如く）その生産物の價格を以て量る。換言すれば生産過程に於ては生産物量として考へ流通過程に於ては價格として居る。従つて經濟表の上に於ては價格として表現せられて居るのである。然しながら自然的秩序に於ける穀物は *le bon prix* を實現し與へられたる條件に於て穀價は決定的であり、條件の變化する場合に於ても取引範圍の廣大なる事よりして自然的秩序に於ける穀價は大體不動と見るを得る。斯くの如き關係よりして經濟表の取扱ふ對象は財貨量として考へても價格量として考へても同一の結果を得るのである。即ち財貨量としての *abundance* と價格量としての *cherté* とが同一の平面に移され従つて自然的秩序の上に於て財貨量として考へる事を得るのである。

斯くしてケネーの場合財貨量を以て國家經濟經營の理論となつたのであるがセイに於ても亦綜合經濟理論でありながら定量財貨の意味によつてその經濟諸理論に内容的統一の體系を與へて居るものであると主張したい。

セイは生産を以て富の生産となし富の生産は效用 *utility* の創造及増加を意味せしめて居る。而して富と效用との

間に價値を入れ、價値と富との間に價格を入れて居る。效用は價値乃至價格の基礎であり價値乃至價格は富の基礎である。而して價格は價値の尺度であり價値は效用の尺度であり效用、價値、價格及び富は順次 *mesure* の關係で連絡し其の間に別に矛盾を認めて居ない。斯く價値價格富の基礎として效用を考ふると同時に生産費によつても基礎を與へて居る。即ち一物の效用によつて價値が認められるのであるがその價値が交換價値なる爲め交換さるゝ相手方によつて表現される。第一物の利用を得んが爲めに拂ふ第二物は獲得の爲の犠牲と考へられ第二物の生産費は從つて第一物取得の費用と考へられる。此の理から財貨の價値は效用と費用との兩面より判斷せられる。即ち『人をして一物を得んが爲めに何等かの犠牲を拂はしむる動機は其の物が満足させ得る欲望乃至其の物の效用より生ずる享樂である』<sup>(註六)</sup>。而して效用價値價格富の連鎖と費用價値價格富の連鎖とは各自體に於て矛盾背反なき連續關係をなし且つ兩者は一致せる状態に於て財貨が取扱はれ流通經濟の對象とされて居る。之れ流通經濟の對象たる財貨の價値をケネーの場合の自然的秩序に於て、或はスミスの自然價値状態に於て、或は動態經濟の極限としての靜態經濟に於ける問題とし取扱へるものである。即ち曰く *En effet, lorsqu'un homme vend à un autre un produit quelconque, il lui vend l'utilité qui est dans ce produit; l'acheteur ne l'achète qu'à cause de son utilité, de l'usage qu'il en peut faire. Si par une cause quelconque, l'acheteur est obligé de le payer au-delà de ce que vaut pour lui cette utilité il paie une valeur qui n'existe pas, et qui, par conséquent, ne lui est pas livrée.* <sup>(註七)</sup>斯く生産物を賣る事はその中に含まるゝ效用を賣る事であり、買手はその物の效用の爲めに買ふのである。故に若し買手がその效用以上支拂ふた場合は彼は存在しない價値を支拂つた事になる。而してその註を見れば問題は明に自然價値状態を考へ

て居る事が分る。即ち Ceci recevra de nouveaux développemens. Il nous suffit, quant à present, de savoir qu'en quelque état que se trouve la société, plus la liberté de produire et de contracter est entière, et plus les prix courans se rapprochent de la valeur réelle des choses. (註八)

斯くセイは經濟學原理に於て自然價值關係に於ける財貨を流通の對象として理論を考へて居る。故に前述の如く效用價值價格及び富は順次 mesure の關係で連絡しその間に何等の矛盾なくまた費用價值價格及び富の連鎖が之れと適合する状態を考へ得るのである。勿論彼は效用と費用との合致せざる場合の價格即ち la valeur réelle より離脱した場合を考へ價格の關係的變化と實質的變化とを問題として居る。然しながら經濟學原理の流通對象は自然價值狀態に於ける財貨であり斯るが故に市場理論に於て豫定調和的主張を強調し得るのである。

斯くてケネーの場合財貨の物質量にて考へる事と價值量にて考へる事と一致せる如くセイの場合に於ても人間と財との關係に於て考へらるゝ效用を出發點とせる富を物質量としても價值量としても同様に考へ同様に取扱ひ得るのである。(註九)而してケネーの場合の如く流通經濟理論の綜合をなす市場理論が既に述ぶる如く外廓的なる體系を興ふると同時に此の市場理論は内容的に定量財貨を蓄へ綜合經濟論でありながら國民生活維持發展の國家經營論的色彩を加へ此の定量財貨に結付けられて經濟諸理論が統一せられて居るのである。

以上の論述によつてセイの市場理論はケネーの經濟表とスミスの需要供給論を綜合せるものであると同時にセイの經濟學は此の兩者の經濟學の綜合たる役目をなしたものである事を説いた。斯くて個別的經驗的なるスミスの經濟學をケネーの方法によつて統一ある體系を與へ名目論的經濟學を本質論的經濟學となした。セイの經濟學が經濟學史上

多くは特別の地位を與へらるゝ事少く單なるスミスの祖述として甚しきはスミスの廉價版の如く考へられて居つたにすぎないが、上述する所誤なくばしかく簡單に看過し得ないものである。勿論セイの經濟學特殊理論への貢獻として數えられるものは少くない。例へば經濟學に對し非物質的富の導入、生産及消費の意味の訂正、價値理論に於ける費用と效用との綜合企業者職分の尊重と Industrialism への轉向等皆然りである。然しながらその市場理論は特殊理論として重きをなすと同時にその經濟學方法と相俟つて綜合經濟學に對し統一體系を與へた點最も重しとせねばならぬ。彼によつて初めて統一體系ある近代的綜合經濟諸理論が確立せられ凡ての所と凡ての時に通用すべき經濟學が主張せらるべき自己完了的理論が成立したのである。英國正統派經濟學が經濟事情の變化を考へず時代を越えて自己の妥當性を主張する如く非難せられて居るが此の非難はセイの經濟學に加へられてはじめて當然なのである。英國正統派經濟學は經驗的名目的理論であり、考へらる如き絶對的主張を包藏する筈なく、またその敘述に於て到る所に經濟事情の時代的段階を區別して理論そのものゝ内容を檢して居るを見ても斯かる非難は不當に加へられたるものである。然しながらセイに於てはケネーに於けると同様に又自らも主張する如く不易の理論を主張すべき性質にあるのである。(註一〇)

斯く體系づけられたる近代經濟學はその後英國に於ては依然として舊態を脱せず體系なきものとして相續せられ佛國に於ては體系ある經濟學とし今日に至つて居る。(註十一)

(註一) 三浦新七博士 アダム・スミスの體系なき體系、商學研究第二卷第三號所載。

(註二) F. Quesnay, *Maximes générales du gouvernement économique d'un royaume agricole*, œuvres, p.

(註三) F. Quesnay : *Œuvres*, p. 247—8.

(註四) F. Quesnay : *Sur les travaux des artisans*, p. 552.

(註五) F. Quesnay : *Œuvres*, p. 233.

(註六) J.-B. Say : *Traité* p. 316.

(註七) J.-B. Say : *Traité* p. 58.

(註八) J.-B. Say : *Traité* p. 58. 脚註

(註九) セイの效用 *utilité* はそれ自身として物質量たる意味を持つて居る理ではない。此の點に就てはスキムスの *utility* こそ衣食住の資料たる意味で物質量たる性質を含む。何となれば水に大なる *utility* を認めダイヤモンドに認めないのはその爲めであると解し得るからである。

セイの *utilité* は人間と財貨との關係的現象であり従つて生産消費の目標となり價值理論の基礎をなす。經濟學に於ける彼の *utilité* は斯く人間と財貨との關係であつて主觀的なものではあるが、彼の道德的行爲の基礎たる *principe de l'utilité* の現れであり (*Essai sur le principe de l'utilité*) 眞に *utile* なるものは自己 *lui-même* 國民 *nation* 人類 *l'humanité* の間に衝突なく *vertue éclairée* の基礎たるものにして客觀的性質を帯びる。されば眞に自己にとり *utile* なるものを知る事即ち眞の利益 *le vrai intérêt* を知る事が道德の始めであり (*Petit volume contenant quelques aperçus des hommes et de la société*) 經濟學は先づ此の大なる目的に添ひ眞の利益 *véritable intérêt* を知らしめると同時にその智的教育を含む一般的教育を有效ならしむる基礎としての國民の物質生活上を進むる役目をなす。斯くて經濟學は彼にとり第一の道德書となるのである。 (.....aussi le premier livre de morale fut-il, pour les Oubiens, un bon traité d'économie politique. Oubie)

斯くの如き關係にある *utilité* は人間と財貨との關係に於て財貨に則して認められたる性質であるが社會各人が眞の利益效用に則して行動する時は、*valeur réelle* と *prix courant* とは一致し調和市場の實現となる。隨つて此の状態に於ける *utilité*

は價值價格富と逆行する事なく量的關係として取扱ひ得る理である。

(註十) 此の精神は彼の方法に明かに現はれて居るが *Traité* の第三版(1817)の序文を見ると尙確である。……*Trop facile pour s'opposer à une telle usurpation, et ne voulant pas la servir, l'auteur du s'interdire la tribune jet, revêtant ses idées de formules générales, il écrivit des vérités qui pussent être utiles en tout temps et dans tous les pays. Telle fut l'origine de ce Traité d'économie politique.*……

(註十一) 英佛經濟學の持つ意味の相異對立はその一端だけでも説明し得たと信ずる。十八世紀後半から十九世紀初期迄の經濟學に於て上の様な對立がある許りでなく、それ以前に於てもそれ以後に於ても同様であると思ふ。即ち以前に於けるメルカントリスムに於ても英國のそれは商賣人の主張たる意味が強く佛蘭西のそれは國家の役人の經營論である。Orthodox 以後に於ても同様に英國の經濟學は佛國のその如くガツチリしたシステムを持たない。A. Marshall の如き現代の經濟學で *«ミス* を讀んだと同様の印象を受け同様の方法で理解し得る。佛蘭西に於ても近頃出版されるものでも全くセイと同じ意味を持ち外國の影響を受けて居つてもその核心に於て變つて居ないと思ふ。

只數學を經濟學に應用した場合之れを如何に見るか、尙此の場合にも似た様な相異對立が見られるか疑問である。例へば W. S. Jevons と L. Walrus との間に私の豫想する相異があるか如何かは怪しいが少くとも Jevons の場合は統計的研究多數的研究即ち經驗的研究の終局の結果が轉換した意味の數式なりと解し得る様に思ふ。之れに反して Walrus の數式は量的研究を待たずして直接に現はれ得る符號の式であつて *absolutism* の現れではあるまいか。従つて兩者の抱く限界效用説に重要な意味の相異があると考へる。然し數理經濟學に素人である私には未だ斷定の自信がない。

要するに英佛經濟學の間にはその各の内で種々の相異があるであらうが概論すれば上の對立は確かに存し各の要求、考へ方に合した身についた學問をして居るのである。

知識を廣く世界に求めて居る吾々日本人は結果に於てどうなつて居るであらうか。世界の學問を容れて今日に至つながらそれ

を取扱ふ要求なり態度なりはその中に動いて居る吾々にとつて容易に分らない。唯一の經濟學を要求すべき事は勿論であるが經濟學の一つに了つて居る事は過去の事實である。此の意味で材料は借りても精神は借りない身についた學問が欲しい、否それは既に達成されて居るのかも知れない。

知識を廣く世界に求める。之れは絶對に必要である。然し木に竹をつぐ事は危険である。材料としての外國の經濟學をよく吟味した上で眞に吾々の要求によつて處理したいものである。

## 八

以上に依つてセイの市場理論の何物であるかを明かならしめ得たと思ふが更に進んで恐慌理論として如何なる地位にあるかを考察して見たい。

扱てセイの市場は調和市場或は均衡市場であつて、凡ての財貨は他の財貨に對して供給として動くと同時に需要たる作用をなし、此の二面的作用によつて市場に多くの財貨が供給されても生産過剰なしとする。財貨の一般的生産過剰のなきは勿論部分的生産過剰も起らないと考へる。部分的生産過剰の起ると見るは之れ部分的生産不足であつて他の財貨の生産増加によつて矯正される。即ち市場の梗塞にあらずして市場發展の誘引と解するのである。斯くの如き市場觀は樂天的なる *Ordre naturel* を背景とするものである事は勿論であるが當時之に反對の市場にあるものとしてはその著しき者に *Malthus* 及び *Sismondi* がある。セイは後にマルサスとの手紙の往復による論争によつ

て動かされ市場に於ける財貨の交換を有效需要の對立なる見地からはなれ、需要の根據として有效なる考のみならず慾望をも加へ、市場の均衡を單に財貨と財貨との關係として取扱ふのみならず財貨と消費の關係としても考ふるに至つた。斯くて *Traité d'économie politique* の問題としては既に述べた無條件的市場調和を主張し、*Cours d'économie politique pratique* の問題としてはマルサスの影響を受けた條件的市場調和と觀をとるに至つた。即ち生産されたる財貨は風習慾望資本勞働土地等の状態により定まるべき各種の財貨に對する需要を呼び起し其の最も多く需要さるゝ財貨は生産者に對し最も大なる利益を興へる。斯く財貨そのものに附着する社會的需要の度合の異なるにより生産も加減せられなければならない。先に財貨は常に他の財貨に對して需要となり供給となるが故に市場に向つて生産さるゝ財貨の量如何によつて調和の破るゝ事なしと言ふは抽象的(註一) *quantité abstraite* の問題であり實際は財貨の社會的性質によつて過剰たり得る境界が存するものである事を認めて居る。然しながら彼の本心は依然として市場調和論であり生産過剰による恐慌否定論である。それは上に述ぶる様に部分的生産過剰を認むるに至つても尙純理論の問題として回避し *Cours d'économie politique pratique* の問題にすぎないと言つて居るにても分る事である。(註二) 然のみならずその問題を取扱ふべく認めて居る *Cours* に於てすら一八二五年の英國の恐慌は自己の *théorie des débouchés* とは關係なく貨幣信用の變動によるものとして銀行券發行の過多、割引の過剰、銀行券の下落、正貨の取付、割引の停止、商人銀行等の破産等の経過をとる金融恐慌なりとして居る。(註三)

斯くの如く恐慌理論に於て消極的態度をとるのは佛國古典經濟學に見る共通性であつて社會生活に自然的調和の影を強く見んとする要求に出でた結果に外ならない。即ちセイと同時代に或は後に來た Charles Dunoyer, Pelleg-

rino Rossi, Frédéric Passy, Michel Chevalier, De Molinari 等は始と上の傾向を帶び自然的秩序による社會調和、市場調和を考へて居た。殊に Frédéric Bastiat に至つては社會法則、經濟法則を *loi providentielle* となし合理的自由主義を極端に主張して居る。彼の生産過剰による恐慌否定論はその著 *Sophismes économiques, Harmonies économiques, Petits pamphlets* の所々に現はれて居る。以下少しく彼の主張を *Pamphlets* の中に於ける一篇 *Abondance* (註) より 見る。彼は “*l'abondance vaut mieux que la disette*” なる主張を抱き、*La disette vaut mieux que l'abondance* なる反對論に對する批評の内に述べて居る。彼の言ふ所によれば *Théorie de disette* は生産が過剰に行はるゝ時は市場は閉塞し凡ての職業は困難を來し消費力は生産力に追従すること能はずと主張する。此の考の爲めに或は機械生産を廢止せんとし或は保護政策をとらんとし或は過剰生産より發生すると考へらるゝ諸種の社會的疾癘を恐るゝ政治家が生れ又過剰生産をさけんが爲めに巴里を時々焼拂ふべしとする者が生れる。然し此の考は全く誤れるものであつて有益なるものは益々多く生産され供給さるゝ事が望ましい。また二つの國民の間の經濟的比較をなす場合にその重要なる手段は消費能力の比較を以て爲し得るか、之れは換言すれば *Abondance* を比較する事となる。一個の商品が市場に來るとき其の價值が騰貴するは他種の商品が多きか或は同種の商品が少きかに依るもので後の方法による時は公益を害して自己の利益を謀るものであつて制限獨占特權を生ぜしめる。之れ *Théorie de disette* の主張する所であつて彼は之れを排斥し前の方法による價值騰貴を望み *abondance* を主張し以て生産過剰を否定して居る。

斯くの如き考はその根據をケネー、セイ等の立場に置くものであり教義的色彩を強くもつて居る。されば彼による

と神の作れる此の社會に不調和のあるべき筈なく従つて生産過剰も亦あり得ない。若し經濟的調和が害せられ社會的  
疾病が発生するならばそれは *la loi providentielle* が人爲によつて妨げらるゝ爲めであつて若し自由競争が徹底的  
に行はるゝならば、そは雲散霧消して完全なる社會調和は常に存在し得べしと考へる。即ち自由競争の弊害は人爲的  
障害による自由競争の不徹底より來るとなすのである。(註五)

斯くの如くセイの恐慌理論の消極的態度は佛國經濟學に共通な思想的背景たる自然的秩序合理的自由主義に依るも  
のでありスミス以後の英國經濟學に於ける自然價値の世界をそのまま現實の地上に想定せんとする希ひに發せるもの  
である。即ち時間的に經過する社會生活經濟生活の斷面は常に調和し然も各段階に於ける斷面の相は凡て同一なる事  
を希ふものであつて神の掟に基く落付くべきに落付いた社會、動態の極限としての靜態を畫かんとした結果に外なら  
ない。故に場所的にも時間的にも一個の經濟學體系が考へられ市場は調和し恐慌は否定的に取扱はれ同時に經濟發展  
を取扱ふ動態論は窮極に於て平面的なる經濟圖型に吸収し去らるべき性質にあつたのである。

之れに反し英國正統派經濟學に於てはスミス、リカルドの如くセイと同様に部分的生産過剰を認むる場合に於ても、  
その主張は積極的であり自然價値と市場價値との間に距離の存するを感せしめる。リカルドの如き抽象的續擇的方法  
をとると稱せらるゝ者に於ても經驗的事實たる市場價値を離れず、而してその需要供給論は時間的經過を俟つて始め  
て自働的調節作用を有し市場の均衡が得られるのであり一應平面的なる理論として取扱はれながら動態理論として平  
面的なる經濟圖型と分れ得る性質を持つて居る。マルサスに至つては貨物對所得乃至消費の關係に於て一般的生産過  
剩を認めると同時に經濟的發展 (*Progress of wealth*) と *Principles of Political Economy* の後半に於て取扱ひ

J. S. Mill に於ては經濟動學の分離に到達して居る。之等英國正統派經濟學に於ける經濟生活の時間的經過に關する研究が平面分析的なる經濟學に對し獨立の地位を占め得るや、或は前者は後者に吸收せらるべき運命にあるやは別として、少くとも佛國古典經濟學に比し兩者獨立の存在を事實に於て保有して居ると見得る。此の點に就ての英佛經濟學の差別も自然的秩序に對する距離の相異より來るものであり、斯くてセイの市場理論は恐慌理論としてもまた動態經濟學に關しても英國正統派經濟學に對立して消極的立場にあるものと言ふべきである。<sup>(註六)</sup>

(註一) J-B. Say : *Traité, Livre premier, chapitre XV.*

(註二) J-B. Say : *Traité, Livre premier, chapitre XV.*

(註三) J-B. Say : *Cours 3e partie chapitre, XIX.*

(註四) Frédéric Bastiat : "Abondance" *œuvres complètes de Frédéric Bastiat, Tome cinquième, Paris Guillaumin, 1854.*

(註五) 第四節に於ける(註三)参照。Cobden と Bastiat の自由主義は相距る事遠く。

(註六) 英國正統派經濟學はまた現代の廣い意味の景氣變動論に對して消極的立場にある。

## 九

前節に於てセイの恐慌理論は自然的秩序乃至自然價值の世界に強く引寄せらるゝ爲めに一方に於て佛國古典經濟學一般の傾向たる恐慌否定論に接近し、他方に於て英國正統派經濟學に反して動態經濟學分岐を否定せんとする立場にある事を説いた。本節に於てはその恐慌理論の内容より見て過去に於て主張せられた各種恐慌理論に對し如何なる地

位にあるかを究明したい。

想ふに恐慌理論を市場理論として受取るとき吾々は之れを三つの型を以て迎へる事が出来る。即ち市場に於ける、  
(一)財貨と財貨との投合、(二)財貨の生産と所得乃至消費との投合及び(三)財貨と通貨との關係の何れかにあてはめられる。セイの恐慌理論は第一の型財貨と財貨との關係に於て考へられたものである事は勿論であるが第二第三の型とは如何なる關係に立つや。

セイの市場理論は凡ての財貨は他の財貨に對し需要として働くと同時に供給たる意味をもつ點よりして需給不適合なきを考へ財貨の種類そのものより來る需給不適合を逸視したるものとして粗朴的市場理論なりとの非難を受<sup>(註一)</sup>ける。然しながら言葉の上で單純に財貨と財貨とを對立せしめ慾望乃至消費と關連せしめたる財貨の種類を考慮せざりしも、自然價值關係に於て考へたるものなる以上單純に財貨と財貨とを對立せしめても入問の需要乃至消費との關係に於て調和適合したる財貨種別の對立を前提としたるものに外ならない。即ち彼の市場理論は財貨種別間の關係を考慮したる上での議論にして従つてマルサスに反對せられて部分的生産過剩を認むるに至れるもそれは *cours d'économie politique pratique* の問題にすぎず、純理論の問題としては依然として市場調和に傾くは蓋し當然の事と言はなければならぬ。

斯くの如き意味に於ける第一型としての彼の市場理論は第二型の市場理論と全く相異したものであるか。財貨と所得乃至消費との關係による市場不均衡は資本蓄積による生産増加と消費に振向けらるべき所得の減少とに基き發生するもの<sup>(註二)</sup>と *over-accumulation* と *under-consumption* に依る。若し *Tougan Baranowsky* の主張する如き生

産形式が實行せらるゝならば、即ち年々資本の蓄積が行はるゝも生産財と消費財とが市場の梗塞を來さざるべき様な比例關係を維持し且つ消費財従つて之れを生産すべき生産財の種別をして社會的需要の度合に應ぜしむるを得ば市場不均衡は起らずにすみ得る理である。即ち社會的生産の比例的分配が適當なるを得ば如何なる意味に於ても生産過剩なかるべき筈である。此の關係の破るゝ時第二の型の市場不均衡が起る。之れ部分的生産過剩の現れであつて單に交換經濟なる立場によるのみならず資本主義經濟なる觀點より見直したにすぎない。其他或は企業内部に於ける固定資本と流動資本との不均衡を以てし或は生産の擴張過程に於て流動資本缺乏の發生に歸せんとする説は市場問題として見る時は結局に於て部分的生産過剩問題に歸し得る。勿論之等各種の觀點に立つ分析が個々の恐慌事情の説明として必要なるのみならず效果多きものであるが之等は凡て部分的生産過剩論を内容とするものであつて従つて二つの市場理論は互に排他的のものではない。

次に第三の型である財貨と通貨の關係とは如何なる關係を持つか。此の型に取入れられる恐慌理論は一般物價の騰落を以て恐慌發生の直接事情となし、その原因を通貨數量の變動に求めんとするものであり因果的貨幣數量説を肯定する所謂通貨側恐慌原因説である。通貨と物價との關係につき逆の因果關係即ち物價變動が貨幣數量變動の原因なりとする主張は恐慌原因論として所謂財貨側原因論に包攝せられ之れを市場理論として見るときは部分的生産過剩論となるべき運命にあるものである。従つて通貨側原因論即ち貨幣數量説による恐慌理論と財貨側原因論即ち部分的生産過剩論（第一及第二の型）とは一應別個の理論であつて、若し恐慌原因論を一つの理論に依るべしとするならば兩者は互に他を排斥しなければならぬ。乍然私は此所で別個の恐慌理論として考へられる此の兩者を尙突込んで考へな

ければならない。所謂財貨側原因論たる部分的生産過剩論は之れを價格理論に翻譯して見ると需要供給論となる。何となれば各種の財貨に就て部分的生産過剩が起り次で之れが矯正さるゝ場合或は生産過剩産業の破産倒壊により (M. Sismondi) 或は生産要素の漸次的移動により (英國正統派經濟學) 或は他種生産不足の克服による (J. E. Sayer) 等如何なる方法に依るとも、要するに需要供給の理に基くものであり、之れによつて價格水準の調節を來すものであるからである。故に恐慌原因論としての兩者の關係を考ふる事は需要供給論と貨幣數量説との關係如何を見る事となる。

扱て私は需要供給論と貨幣數量説との關係を考察するに先づ正貨のみの流通する所謂純粹正貨制度の下に於てする。此の場合金は唯一の支拂手段たる貨幣たると同時に一個の財貨である。従つて貨幣數量の増減は他の一般財貨の市場に於ける増減と同一の經過を通して行はれ、兩者は區別する所なく需要供給の理に支配せられる。即ち此の場合貨幣數量説は一般的なる需要供給論に吸収せられ、若しその獨立の存在を認めるならば需要供給論の一つの場合としてか或は需要供給論の延長と考ふべきである。私が嘗て需要供給論と貨幣數量説なる論文に於て<sup>(註三)</sup>リカルドの貨幣數量説は彼の勞働價值説を含む需要供給論の一つの場合として觀察したるは此の意味である。リカルドの貨幣數量説に於て信用通貨を考ふる場合需要供給論に吸収さるべく困難が発生する理であるが、凡ての種類<sup>(註四)</sup>の通貨全部を正貨——金——によつて統制せしめんとする以上、貨幣數量説は需要供給論と完全に離反したものは言へない。一八三〇年代に於ける英蘭銀行の比例準備制度實行も此の意味に基いたものに外ならない。

斯く純粹正貨制度に於ては勿論信用通貨を加へた關係に於ても通貨統制を正貨——金——に委任せんとする制度に於ては、需要供給論と貨幣數量説とは一つの理論であり、従つて恐慌理論として財貨側原因論と貨幣側原因論とを理

論上區別すべき理由はない。此の意味に於て上述市場理論は一つに歸し財貨と通貨との關係も亦第一の型と同様に部分的生産過剩論の一つの現れに過ぎない事となる。而して此の部分的生産過剩論は裏返せば部分的生産不足論となり自然的秩序乃至自然價值關係に強く引付けらるゝ時セイの市場理論を形成するのである。

然しながら純粹正貨制度の實際に存ぜざるは勿論信用通貨の濟部の統制を正貨——金——に委任する制度は通貨主義として一八四四年の英蘭銀行法により實施せられたが、その正確なる實現は望み得なかつた。而して信用通貨の量は遙かに正貨の量を越え正貨は單に支拂手段として補助手段に過ぎず、然も之等信用通貨の供給を正貨——金——に基かしむる事困難なるのみならず、之れを正貨と引離して以て人爲的統制の行はるゝ以上、貨幣數量説を金の部分的生産過剩として思考し去る事は實際に則しない。殊に金の供給即ち金の生産乃至國際的移動に調制せられて國內支拂手段を加減する事の困難なる今日通貨側原因論は恐慌理論上確固たる地位を持つ。況んや金本位制離脱の場合に於ておやである。

(註E)

(註一) Michel Tongan-Barenowsky: *Les crises industrielles en Angleterre*, traduit sur la 2e édition russe par Joseph Schapiro, 1913.

(註二) Malthus: *Principles of political economy* Simonde de Sismondi: *Nouveaux principes d'économie politique* 1e et 2e édition.

(註三) 拙稿 需要供給論と貨幣數量説 商學研究 第四卷第三號。

(註四) セイの一般的なる紹介としては次の書物がある。E. Teilhae: *L'oeuvre économique de Jean-Baptiste Say* Paris 1929